

釣れ釣れなるままに

2003年思い出の溪流釣行記 PART. 4

クワイマシ に変貌



夫婦滝

前回の芦別川釣行でのニジマス57cmの法螺話を聞いた職場の若い娘から、芦別川と一緒に釣りに行く約束をさせられる。彼女は若いにもかかわらず有能な職員であり、興味のあることは一通りこなしてしまうマルチな人間である。しかし、虫を触ることだけは未だ克服することが出来ず、最近、夫と共にルアーを始めたということだ。二人して金山湖にも遠征しているらしいがその成果はいまだ上がっていないという。マンションに迎えにいくと夫妻ともキャピキャピのルアーマンの出で立ちである。夫も一緒とは聞いていなかったの、今日は手取り足取り念入りに指導しながらと鼻の下を長く伸ばしていたのだが・・・。

二人を芦別川に案内すると先日からの長雨で増水し、川幅いっぱい広がって蕩々と流れている。しかも、白濁色に渦を巻きながら・・・。残念だが次回の釣行を約束し引き返すことになる。

久しぶりに晴れ上がった紺碧の空である。私は「今日一日は釣りで過ごす」とした気持ちを払拭することが出来ず、フライを持って住宅の裏を流れるパンケ幌内川の最上流部にある夫婦滝に向かった。なるほど『夫婦滝』と言われる如く山間から落ちてくる二筋の爆流も見事だが、そこから急激に下っていく溪相がすばらしい。大岩と大岩の間を縫うようにして落ちていく清廉な流れがそこにはあった。しかし、私の意に反して魚からの反応は全くない。己のフライ技術が未熟だからとは思いたくないのだが・・・。

罵倒に負けて

10月15日、雨もおさまり晴天の日が続いたので、轟々と渦を巻いていた芦別川の流れも澄んでいることだろうと出かけてみた。しかし、頼城地区に架かった例の赤い橋から溪谷を覗き込むと水量は幾分減ったが、相変わらず白い濁りは治まってはいない。これは降雨のせいではなく上流で工事でもしているのであろう。仕方がないので芦別川の枝川に入ることにする。

地図で確かめながら、採石場に向かう白い橋の袂から一旦、芦別川本流に入る。川の中を進むのだが、浅いはずの川縁も、濁りのために川底が見えず、長い棒きれで底を確かめながら恐る恐る歩くことになった。

粘土が川底に積もり、ヌルヌル、ツルツルと足下が覚束ない。河川工事が終わった後でも、この粘土が押し流され、清流を取り戻すためにはかなりの時間を費やすことだろう。

ようやく、白濁色の芦別川の流れに、澄み切ったサキペンベツ川の流れが注ぎ込んでい



サキペンベツ川の流れ

る出合いに着いた。そこから枝川を遡る。

本日はどんなことがあってもフライで通すことを決意して家を出ている。もちろん様々な誘惑に負けないようにルアーやエサは持って来ていない。

以前、小学生だった息子と一緒に胆振の貫気別川でフライによるヤマメ釣りに挑んだが、全く釣果がなかった。エサ釣りの幼い息子の方は、ヤマメをポンポンと釣り上げる。その勢いと息子からの罵倒に負けて、フライのハリ先にエサを付けたことがあったからだ。しかし、どうであろう。私のことだから、たとえエサを持っていなくても、河原にいるバッタやイタドリ虫を捕まえては、フライのハリ先に付けてしまうことも考えられる。自分で



言うのも可笑しいが、『釣り』となると前後の見境がつかなくなり、「釣れないより釣れた方がマシ」という全く信念もポリシーもない駆け出しのフライマンなのだ。

蓬菜マス

出合いからしばらくはフライに何の反応もなかったが、500m程上流にある大きな淵から37cmと28cmのニジマスが出た。大きい方は何度も見事なジャンプを見せてくれた。水面よりかなり高く飛翔



しているのだが、こちらもゆとりを持ってそれを楽しむことが出来る。このゆとりは、先日、大物を上げた自信とその余裕からくるものであろう。

20cm程のホウライマスも出る。深川市と旭川市の境を流れる内大部川で、この斑点のない桜色のニジマス釣り上げた時には、名前が判らないでいた。水系の違うここにもこの魚がいるということは、石狩川本流から空知川水系にまたがってかなり広い範囲で棲息

していると考えられる。

ホウライマスについては、当初、魚類図鑑で当たっても名前が見当たらず、その生態は判らなかつた。先日、何気なく貴社発行『ルアー王国』の著者である鍛冶英介氏のフィッシングガイド誌『北海道の湖と溪流 [つり人社]』のページをめくっていると、錦多峰川の項にホウライマスについての記述があつたのでその一部を紹介しておく。

この無紋ニジマスの名称は「蓬莱鱒」という。愛知県蓬莱町の県立養鱒場で、ニジマス養殖中に突然変異による一尾の雄が誕生。これをもとに殖やしてみると、優性遺伝することが判明、その後大量に出現するようになった。また、普通のニジマスと同様60cmの大型に成長する。

このガイド誌は今から20年程前に出版されたものなので、今では北海道のかなり広い範囲にわたって棲息していることが推測されるが如何であろう。『北海道のつり』編集者の調査を依頼したいところである。

釣りの唄

さらに上流に遡った浅い淵で20cm程の元気なニジマスが2匹出る。粘液の付いたフライを粉末ドレッシング容器に突っ込んでいる時にテイペットに結び目が付いていることに気が付く。未熟なロールキャストを繰り返した為に出て来たものである。テイペットを根元から切り、3Xのリーダーの先に直接、小さめの青い羽根のストリーマーを付け替えた。

このストリーマーは、裏洞爺での家族キャンプの時に使用したもので、ウグイしか釣れなかつたが成績がよく大変気に入っていたものだ。羽根に付いた円く黄色い模様が小魚の目玉を連想させ、川の中で泳いでいる姿はトゲウオそのものなのだ。

ハリにヤスリをかけてからフライを振り込み、流れに合わせながらゆっくりと引く。ツー、ツーとゆらゆら揺らめきながら近づいてくるそのフライの水面がモワッと持ち上がった。その下に白く尖った大きな塊が見え、ガツンと竿を一気に伸された。大物だ。手首を返してハリをくい込ませると、奴は上流へゆっくりと移動し始めた。手元に残ったフライラインにテンションをかけながら送り出し、私も一緒に上流へと向かう。さらに、ラインがリールからジーッ、ジーッと音を立てて出て行く。今度は奴がグーッ、グーッと下流へとゆっくり移動する。私もラインを巻きながらゆっくりと移動する。奴が向こう岸に向かって走る。川は私の足下から深く抉れているので入ることは出来ず、ラインが出るのに任せる。そして、奴が近づいてきた時には慌ててラインを巻き取るのである。さらに、ゴツゴツした岩の隙間を縫うようにしてスピードをあげて走る。私もラインが岩に擦れないようにと走る。下流で大きく飛翔した後、反転してこちらに加速しながら向かって来た。奴の動きはどんどんとスピードを増してくるような気がする。奴は何度も同じコースを通過して上流へ下流へと走る。前回の大物とは違い全く止まる様子がない。しかし、走るコースはほぼ同じなので、次第に私も落ち着きを取り戻し、奴の動きに対応することが可能にな

った。

やがて、ラインを通して奴がその力を使い果たしてきたのが分かる。最後はタモも使わず、強引に川岸にずり上げる。川の水が奴の腹につかなくなり、さらに川岸の砂利の上をズルズルと引っ張り上げようと手首を返したときにリーダーの先がプツリと切れた。どつど どどうど。

アイザック・ウォールトンは『釣魚大全』の中で「釣魚は詩人の仕事です」と書いてい



る。そして、『釣り師の歌』では「釣は我が手のみにて為し得れば、我は釣りつつ、黙想し得るなり」と詠んでいる。

私にはそう思えない。一旦、釣りにのめり込むと黙想する余裕はないのである。清新な川を取り囲む溪谷を眺めながら詩情を吟ずる余裕はない。そよと吹く風や川のせせらぎの音にも全く耳を傾けなくなる。水中に潜む銀鱗を想い、竿先から通ずる一筋のテグスを頼りに、水面と触れる1点の浮き沈みに瞳を凝らすのである。すると、突如として稲妻の雷鳴が轟き、逆鱗が竿を握る私の手に伝わってくるのである。

体高があり丸々と太った見事なニジマスである。用意した巻き尺で計ると、54cmに届いている。何より、私の未熟なフライ技術で仕留めたことに意義を感じる。まだまだ陽は高いが、本日のファイトを楽しませてくれたそのニジマスに感謝し、奴を川の流れへと見送った後、満足感に浸りながらその川を後にした。

完